

種はその変異中には含まれぬ範疇に属している。本属としてはヒマラヤ地方からは初めての発見で、その分布範囲を遙かに北西に広げたことになる。しかしラン科においてはマレー系のものがビルマを通してヒマラヤ東部の暖い谷間に及んでいることは珍らしいことではない。*Acriopsis* は全長にわたって合一していて、一個に見える側萼片を有することが特長で、芯柱の先端が拡がって小形の葯を深く覆っているのも目立つ点である。旧日本領内では Caroline 群島の Palau 島に 1 種 *Acriopsis insularisylvatica* Fukuyama を多産し、著者も採集して研究したことがある。

○小豆島のヤマトレンギョウ (原 寛) Hiroshi HARA: A variety of *Forsythia japonica* from Is. Shōdoshima

瀬戸内海の小豆島寒霞溪からカンカケニラ、ミセバヤなど興味ある植物を採集された富樫誠氏が、同所産のヤマトレンギョウの苗をもってきて下さってからもう 10 年以上もたった。葉下面や葉柄に毛がある点などヤマトレンギョウに近いが、多少違うところもあるので、毎年観察を続けてきた。その結果差異はかなりはっきりし安定していることが分かったので、ここに新変種 ショウドシマレンギョウとして記載する。小豆島産は中国地方のヤマトレンギョウの基準型と比べて、葉の細鋸歯が目立たずほとんど全辺に見え、花は新葉と共に開いて多少緑をおびた黄色である。花期がおそく東京で栽培すると 4 月半ば過ぎに満開になり新葉と同時に咲くので花はあまり見栄えがしない。2 年生の枝は茶褐色で皮目が多く、髓は薄板状であるが古くなると中空になる。苗条では葉は時に 3 裂し、またあらい鋸歯がでることもある。株によって、雄ずいが花筒から抽出し花糸は長さ 4—5 mm で花柱は短かく 2 mm ばかりのものと、花柱が長さ 5 mm 位で抽出し雄ずいの短かいものとある。萼裂片は円味があり長さ 5 mm。終りに資料を提供された富樫誠氏に深謝する。

*Forsythia japonica* Makino var. **subintegra** Hara, var. nov.

Folia subintegra. Flores cum foliis coetanei citrini-flavi 2-3 cm in diametro. Nom. Jap. Shōdoshima-rengyo (nov.).

Hab. Japonia. Prov. Sanuki: Kankakei ins. Shōdoshima (M. Togashi, Maio 13, 1961—Typus in TI; Oct. 5, 1952). (東京大学理学部植物学教室)

□ T. Swain (ed.): **Chemical plant taxonomy**, 543 pp., 1963, Academic Press 発行, 1105 S 16 名の学者がそれぞれ専門分野から書いた本で、内容的には相当専門的でありむつかしい。Chemotaxonomy なる言葉が各所に出てくるが、すでにこのような言葉が使われている。内容の二三をひろってみると: Some aspects of chemotaxonomy (Erdtman, H.); Usefulness of chemistry in plant taxonomy as illustrated by the flavonoid constituents (Bate-Smith, E. C.); The taxonomic significance of alkaloids (Hegnauer, R.) 等々。6600 円 (井上 浩)